



Data 2025-101

監督・脚本・プロデュース：丈

出演：原田龍二／長谷川朝晴／木之元亮／倉野尾成美／村山彩希／三浦浩一／二瓶鮎一／植松洋／マイケル富岡／金城大和／バーンス勇氣／石田隼／清水一光／栩野幸知／大原誠三／河原健二／宗林咲智／丈／崔哲浩／片岡鶴太郎／高島礼子

👁️👁️ みどころ

『ハオト』だけでは何のコトかわからないが、伝書鳩の「羽音（はおと）」と聞けば、なるほど、なるほど……。しかし、それにしてもなぜそれが本作のタイトルに？

時は日本の敗色が深まる 1945 年。舞台は東京郊外の木造の校舎を改装した精神病院。そして、主人公は個性豊かで多種多様な（？）入院患者たちだが、なぜそんな映画が商業映画として成立するの？

劇団四季のミュージカル『異国の丘』（『シネマ 1』98 頁）は、九重秀隆と愛玲が共に戦争回避のために献身的な努力を続ける姿が感動的に描かれていたが、本作もそれと同じように（？）、新たに精神病院の管理者となった海軍将校がソ連の仲介による和平工作を目指す姿が描かれるので、それに注目！

舞台の映画化だから製作費はメチャ安だが、俳優陣の熱演はそれなりに！しかし、白い伝書鳩の足に結ばれた「誰か私を見つけてください」と書かれたメッセージを、あなたはどうか考える？

■□■ 「ハオト」ってナニ？それは白い伝書鳩の羽音（はおと） ■□■

本作のタイトルはカタカナで「ハオト」だが、それって一体ナニ？本作を最後まで鑑賞してもなお、その意味がわからない人もいるようだが、本作は、2005 年に東京・下北沢の本多劇場で上演された舞台を丈監督が映画化したものだとか聞けば、何となく……。

本作には太平洋戦争末期、東京郊外にあった精神病院に入院している患者がたくさん登場し、その中の 1 人として元 AKB48 のメンバーだった村山彩希（ゆいり）演じる藍が登場するが、その藍が平和の祈りを込めて未来へ放つ白い伝書鳩が奏でる羽音（はおと）が本作のタイトルとされているわけだ。

本作を監督・脚本・プロデュースしたのは、漫画家の石ノ森章太郎を父に持つ元映画俳優の小野寺丈を改名した丈（じょう）だ。2005年に下北沢の本多劇場で初上演した本作はまさに舞台劇の香りがブンブンする作品だが、精神病院が舞台とは何ともはや、面白そうだ。さて、昭和100年、戦後80周年の記念すべき節目の2025年に、「戦後80周年平和記念作品」として製作された本作の出来は？

■□■大叔父が「人を殺した！」と告白！時代は1945年に！■□■

本作の冒頭の舞台は現代の東京。初夏のある日、90歳を超えた大叔父・菅沼守（二瓶鮎一）が刑事である甥（丈）の元を訪れ、「人を殺した！」と物騒な告白を！そう言われれば、息子としては真剣に大叔父の話をかざるを得ないが、それは太平洋戦争末期のある施設の話。そこは、表向きには精神病院と称されていた、小学校を改装した特殊機密施設だったらしい。

私は戦時中の日本にも「陸軍中野学校」なるスパイ養成学校があったことを市川雷蔵主演の映画『陸軍中野学校』シリーズでよく知っているが、太平洋戦争末期にあったというそんな施設では一体ナニが？菅沼が語り始めた物語は、まさに初耳、そして興味津々だが、さてその実態は？

■□■患者たちの超個性に注目！なるほど正常と異常は紙一重■□■

“先の大戦”中、日本は“現人神”と呼ばれる天皇陛下が統治する国だったし、天皇陛下は元首で軍を統帥する立場だったから、その天皇陛下を批判することなどもってのほか！したがって、「侵略戦争反対」と共に「天皇制打倒」と主張した日本共産党が弾圧されたのは理論上当然だ。しかし、それは正常な人間に対すること。精神異常者なら「天皇制反対！」と叫んでも、「日本は負ける」と予言しても、それが罪にならないのは、刑法理論上当然のことだ。しかし、太平洋戦争末期の1945年、東京郊外にある、表向きは精神病院と称する特殊機密施設に収容されている患者たちの超個性に注目！

その患者たちは、次のとおりだ。

- ① 弟・正和（石田隼）が原因で突然軍を辞め、戦争や軍を批判し精神病扱いをされた元エリート海軍将校の水越（原田龍二）
- ② 原子爆弾開発間近に解離性同一障害となった荒俣博士（片岡鶴太郎）
- ③ 虚言症と診断されたものの、戦況を語るその虚言が100%当たる“閣下”（三浦浩一）
- ④ 21世紀の未来の男性と交信していると伝書鳩を飛ばし続けている藍（村山彩希）

彼らは一見何の異常もなさそうだが、本作導入部で紹介される彼らの言動を見ていると、やっぱりどこか変！いや、かなり変！いやいや、彼らの変なのではなく、それを変だと思ふ私たち一般常識人（？）の方が変なの？なるほど、正常と異常は紙一重ということか！

■□■施設の指揮権が陸軍から海軍へ移行！その狙いは？■□■

この精神病院の管理権は陸軍にあり、森本中将（木之元亮）が指揮していたが、ある日施設を訪れた海軍少将の蓬壮七（長谷川朝晴）が、「施設の管理権が陸軍から海軍に移行し

た」ことを伝えたからビックリ！それは一体なぜ？太平洋戦争突入当時から、日本の陸軍と海軍の仲の悪さ、連携の悪さは目立っていたが、サイパン島の玉砕が伝えられ、いよいよ沖縄への攻勢が現実味を帯びてきた今、なぜ東京郊外のこんな精神病院（ごとき）の管理権を巡って陸軍と海軍が争い、海軍が勝利したの？蓬は水越と同期の海軍兵学校出身者だが、水越と違い今や少将にまで出世している彼の思惑は、ハワイ生まれの日系人である米国の諜報員・津田辰也（バーズ勇気）を二重スパイとして雇い、またソ連に仲介してもらって和平交渉を進めようというものだったからすごい。蓬はそんな計画達成のためソ連大使・ロモフ（マイケル富岡）と森本中將の替え玉を施設に呼んだが、そんな大それたことがこんな片田舎で可能な？他方、そんな情報さえも入手していた米国は津田の存在を怪しみ、同じく日系ハワイ人の田中秀明（金城大和）を二重スパイとして施設に送り込むことに・・・。

私は劇団四季のミュージカル『異国の丘』（『シネマ 1』98頁）が大好きだが、同作では九重秀隆と愛玲が共に戦争回避のために献身的な努力を続ける姿が感動的に描かれていた。それに比べると、水越の和平工作は漫画みたいなもの・・・？いやいや、それはそれで素晴らしい・・・？

■□■一方の主演は水越！他方の主演はこの女性！■□■

本作は異色の戦争映画（反戦映画）だが、東京郊外の古びた木造校舎を精神病院に見立てて舞台にしているだけだから、俳優のギャラ以外の製作費はメチャ安そうだ。収容されている（精神病）患者たちの個性はメチャ豊かだが、なぜここに収容されているのかが最もわかりにくい患者が水越だ。



彼は唯一の肉親である弟の正和（石田隼）が特攻として散っていくことに強い違和感を覚え、その結果として反戦海軍士官になってしまったことが、本作中盤でそれなりにストーリー展開されるものの、それだけで水越が精神病院送りとされたことには、イマイチ説得力がない。したがって、後半に至って、蓬少將の尽力もあって、その水越が今度は大日本帝国海軍少佐として軍隊復帰し、蓬少將の戦略どおりに働く姿にも少し違和感がある。水越の気持ちちがわからないではないが、少し単純すぎる

のでは？

他方、そんな水越が優しい入院患者だった時に、「おまじないをしてあげる」と言われて少し浮かれた気分になっていた（？）藍は、物語の当初から風変わりな雰囲気 で存在感を放っていたが、彼女の放つ白い伝書鳩は一体どこに向かって飛んでいたの？また、その足につけられた手紙には一体何が書かれていたの？本作の中盤にかけては、そんな点に興味津々だが、それは本作ラストで一気に明かされるので、それに注目！

■□■二重スパイをめぐるドタバタ劇はかなり漫画的？■□■

「二重スパイ」をテーマにした「スパイもの」はハリウッド発、中国発、韓国発を問わず、各国それぞれの特徴が濃密に取り入れられた素晴らしい作品が多い。しかし、本作後半はそれと同じように、敗戦を間近にした日本がソ連を仲介として和平工作を展開するという壮大なストーリーの中で二重スパイが暗躍するものだから、それなりのシリアスさとそれなりの迫力が！そう期待したが、残念ながら舞台劇の延長レベルの本作にそこまで期待するのはムリ。銃を手に精神病院内を縦横無尽に歩き回る本職のスパイの強靭さが目立つ一方、精神病院の警護の手薄さは否めない。すると、せっかく蓬少将が確保したソ連大使ロモフや、荒俣博士の身の安全は？さらに、それを守ろうとする水越たちの身の安全は？

■□■「誰か私を見つけてください」のメッセージをどう考える？■□■

米国が“新型爆弾”の開発に着手していることは、日本の専門家の間でも常識になっていた上、ドイツでも日本でも「我こそが先に新型爆弾の開発を！」と、血まなこになっていたのは当然だ。そこで和平を狙う蓬少将が不可欠だと考えたのは、荒俣博士が乖離性同一障害から早く回復し、数ヶ月以内に原子爆弾を完成させることだ。したがって、そんな貴重な人材を、米国から送り込まれた“二重スパイ”ごときに殺されてはたまったものではない。本作のクライマックス（？）では、精神病院を舞台にいかにも演劇風な（？）そんな死闘（？）が展開されるので、それに注目！

本作が“反戦映画”であることが明確に示されるのは、そんなクライマックスともいえるドタバタ劇が終わった後、舞台が再び現代に戻り、大叔父と丈が2人並んで座るベンチに、1羽の白い伝書鳩が飛んでくるシーンだ。これはきっと藍が未来に向けて放ったあの白い伝書鳩だが、2人の足元に降り立った伝書鳩の足に結びれていた手紙に注目！大叔父がそれを読んでみると、そこには「誰か私を見つけてください」と書かれていたからすごい。なるほど、1945年のあの時代、あの施設の中で、藍はそれを求めて未来と交信していたわけだが、あなたはこのメッセージをどう考える？もっとも、“てな物語”に納得できるかどうかは、あなた次第だが・・・。

2025（令和7）年10月29日記